

與謝野 寬石川啄木
與謝野 晶子 北原白秋 集



現代日本文學全集

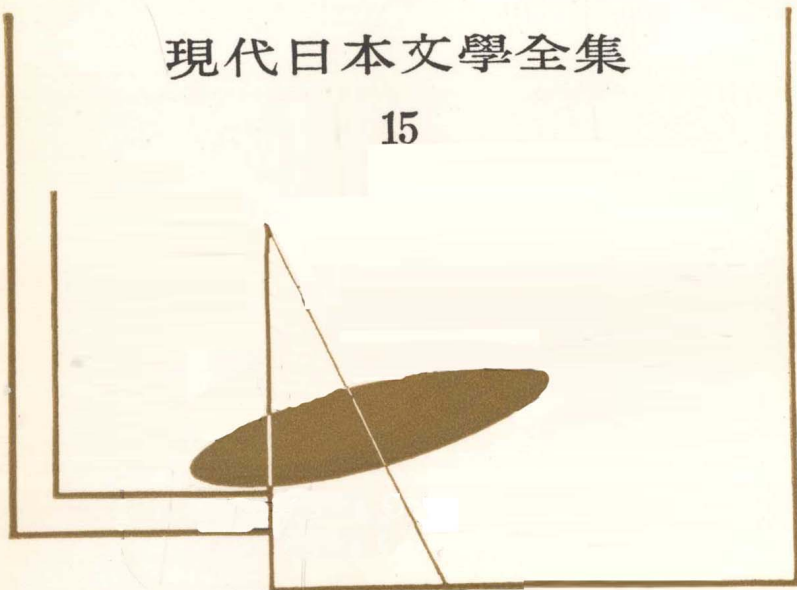
15



寬子木秋
野晶啄白
謝野川原
與謝石北
集

現代日本文學全集

15



筑摩書房版

與謝野 寛
與謝野 晶子
石 川 啄 木
北 原 白 秋 集

昭和二十九年十一月一日 印刷
昭和二十九年十一月五日 發行

著 者

與^よ謝^さ野^の寛^{ひろし}
與^よ謝^さ野^の晶^{あき}子^こ
石^{いし}川^{かは}啄^{たく}木^{はく}
北^{きた}原^{はら}白^{はく}秋^{しゅう}

發行者

東京都文京區台町九
古 田 晃

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山 田 一 雄

發行所

東京都文京區台町九
筑 摩 書 房

電話小石川 (92) 五一・七〇一
編輯部 二〇一五七
振替 東京 一六五七六八

製版 株式會社 精興社
印刷 株式會社 精興社
製本 有限會社 和田製本工場
クロース 日本クロース工業株式會社

與謝野 寛集 目次

東西南北(抄).....五

紫.....三

與謝野 晶子集 目次

みだれ髪.....四

舞姫.....六

石川啄木集 目次

一握の砂.....七

悲しき玩具.....一〇

あこがれ(抄).....一四

呼子と口笛.....一三

鳥影.....二六

我等の一團と彼.....一八

時代閉塞の現狀.....二五

北原白秋集 目次

邪宗門	二二三
思ひ出	二五八
桐の花	三三三
黒檜(抄)	三七一
與謝野鐵幹論(吉井 勇)	三七九
管見與謝野晶子(佐藤春夫)	三八三
啄木に關する斷片(中野重治)	三九〇
北原白秋論(矢野峰人)	三九五
解説	四〇一
年譜	四〇九

裝幀 恩地孝四郎

與謝野
寬集

東西南北 (抄)

東西南北敘

方今我國の文學に於て最も屬望すべきもの、二あり、何ぞや、曰く、戯曲、曰く、新體詩、是れなり、戯曲は姑く之れを措き、新體詩の何故に然るやを述べむに、古來吟詠する所、和歌と漢詩と、之れあり、就中和歌は一種の擬古體にして、其文字制限ありて、僅に一片の情緒を攝ぶるに止まる、時に長篇なきにあらざるも、慣用の方式に拘はり、言句の多き割合には事項の見るべきもの少く、吾人をして華にして實なきの嘆あらしむるを奈何せむ、漢詩は和歌よりも一層發達せるものにして、之れを作り、之れを誦すれば鬱を解き悶を遣るに足る、然れども漢詩の到底吾人の意に快からざるものあり、是れ他なし、漢詩は支那の文學なり、我邦の文學にあらず、漢詩を盛にするは我邦を忘れて支那の力を致すなり、猶直接に之れを云へば、漢詩を作るは我邦人の輕蔑する支那人の精粕を嘗むるなり、猶も男子と生れ、廉恥の何たるを知らる以上は豈に獨り支那人の精粕のみに戀々たるべけむや、

是故に吾人は已に擬古體の和歌を排し、又支那人の餘睡に本づく漢詩を廢して、別に我心情をあらはすべきものを求め、遂に新體詩と稱する國詩を作り出だせり、假令ひ其成效の如何は未だ豫知すべからざるも、已に我邦に於て文學の新區域を開拓せるや疑なし、初めは新體詩に向ひて攻撃を試み、尙ほ陳腐なる擬古體を挽回せむとするものありたれども、一たび震盪したる激浪は滔々汨々として遂に大潮流を成し、將に底止する所なからむとす、與謝野君鐵幹曾て落合直文氏に學び、和歌を作るに巧なり、然れども其時勢を見るの速なる、蚤に思を新體詩に凝らし、作る所數十篇あり、其中見るべきもの少しとせず、頃ろ其韓山風雲の間に得る所のものを加へて、東西南北と題し、世に公にせむとす、蓋し亦新體詩派の爲めに一勢力を添ふべきものならむ、因りて平生思ふ所を卷端に書して、以て之れが序となす、

明治二十九年七月五日

井上哲次郎識

序

京都の地たる、山うるはしく、水明かなり。そこに住むものは、おのづから、歌よむ情の起るらむ。與謝野鐵幹は、京都の人なり。歌にたくみななるも、その故にや。鐵幹は、わが淺香社の社友なり。社友三十名前後、いづれも、その歌に、一種の特色を備へ居るが、鐵

幹の如きは、雄々しき調を以てまざるものか。鐵幹、このごろ歌集を出さむとて、そのはじめに、余の歌論をしるさむことをもとむ。余の歌論は、鐵幹のよく知るところ。今、あらためて、なにをかいわむ。たゞ、いはまほしきは、桂川と鴨川と、いづれか雅にして、いづれか俗なるといふことなり。また、東山と嵐山と、いづれか優にして、いづれか拙なるといふことなり。鐵幹、よく知らむ。桂川は、水聲清くして、影をひたせる月、また、をかしきにあらざるや。これに反して、鴨川のひなびたる景色は、いかに。嵐山は、松ふく風、すゞしくして、ふりくる雨、また、おもしろきにあらざるや。これに反して、東山のいやしげなるながめは、いかに。今の世の、新體詩とかいふものを見るに、鴨川のほとりに、絃歌の聲をきくが如く、また、東山のふもとに、洋燈の光を見るが如くなるにあらざるや。余は、鴨川と東山とのひなびたるけしき、いやしげなるながめなることは、はやく認めたり。水を愛せむには桂川、山を賞せむにはあらし山といふことをば、はやく見しりたり。鐵幹もまた、これに對しては、異議なからむ。さはいへ、桂川にむかひて、驚浪、龍門を下る勢をもとめらるべきか。嵐山にむかひて、巖炭、晴空に聳ゆる姿をもとめらるべきか。そはまた、白河と比叡の山とあるにあらざるや。鐵幹の歌を見るに、桂川あらし山は見終りて、深く白河にさかのぼり、たかく比叡の山にのぼら

むとするものゝ如し。その志、壯とやいはむ、快とやいはむ。余、この夏、ぬしの故郷なる京都に遊び、白河に、比叡の山に、暑を避けむとす。鐵幹、歌集の出づるをまち、そを携へて、來り訪へ。水聲激するあたり、白雲深きところ、手を取りて、歌論をなすも、また、一快事ならずや。

七月六日の夕つかた

萩の家の主人 直文

東西南北に題す

ふる草は、かれくにして、
にひ草は、色あさき野に、
たのもしく、芽ぐむ二葉よ、
なれはそも、いかなる種ぞ。
一とせの、はかなきものか、
冬ごもる、ねづよきものか。
その二葉、こたへていはく、
おひさきは、我も知らねど、
あめつちの、力のまにま、
萌出でて、かくこそ立てれ。
うら／＼と、照れる日影を、
うちあふぎつつ。

丙申の歳

鍾禮舎主人 鳴外

序

歌を論ずるはやすくして、歌をよむはかたし。近ごろ、歌を論ずるもの陸續として出づ。然

れども、その論のよきに似ず、その歌の感ずべきがすくなきは如何。なごか歌を論ずるに先だち、みづから歌をよみて、人の模範とはせざる。その順序をあやまれるにあらずや。わが友鐵幹君の歌における、よく論じ、よくよみ、早く一家を成して、長短、意の如くならざるなく、殊に長篇にたけたり。事を敘し意を舒ぶる、雄大に、豪放に、専ら氣を主として、區々、辭句の間に麗観たらざるが如く、しかも、微をつらぬき、密をとほし、趣あり情あり、讀者として、覺えず掌を拊ちて、快と呼ばしむ。まことに、平生の論にそむかざるなり。されば君は、從來の纖弱なるものをのみ歌と思へる世に立ちて、大聲疾呼し、必ず雄篇の出でざるべからざるを説き、爰に先づ自ら、近作若干を集めて、一冊として、以て大に世の批評を乞ふところあらむとす。その進取の氣、敬服に堪へず。序を徴せらるゝにあたり、一言することかくのごとし。

明治廿九年七月一日、さみだれ初めて
晴れ、若竹の葉風涼しき窓の下にて、
しらがしのやのあるじ、

鯛二するす。

序

今の世の歌は、大よそ、二つにわかれたるがごとし。その一つは、詞をも心をも、古めかしく、よみ出づるものにして、その一つは詞をも心をも、なるべく、今やうに、よみ出で

むとするものなり、されば、一つは賀茂川の流をたどり、一つは香川の雫をくめりなど、人はいふべし。さはいへ、共に一つの形式を守りたれば、新調といふも、必しも新ならず。いひもてゆけば、一つ道におつめり。こゝに、我友與謝野寛氏は、常に今の世の歌の、吟ずるに足らざるを憤りを人なるが、この頃尋ねきて、議論は功少し、我は、わが思ふところあれば、みづからの歌を、世に公にせむとす。いかで、一こと添へずやといふ。見るに、その集の名の、東西南北といふさへ、めづらしきに、よみ出でられたる長歌短歌など、その體、全く、今の世の歌人の流と異なり、この書、一たび世に出でなば、ほむる人、そして人、その議論いくばくぞ。おのれも、未だその形式の、全く備りたるものとは、思はざれど、かの賀茂香川のしづくをのみくみて、歌とおもへるものより、遙にその志の遠大なるを、よろこぶものなり。さるは、歌はもとより、一つ心よりおこりて、萬づの言の葉となれるものなれば、たゞ形式にかゝはりて、詞をかざり、句をねるをのみ、つとむるものにあらざればなり。あはれ、よく讀み味ひてよ、東西南北の人々。

明治廿九年七月、梅雨ふりつく窓のもとにて。

藤園主人 小中村義象

東西南北の序

風は心無きものなめり。それすら東に行き西に至り、南に奔せ北にかけり、木を抜き水を溢れしめ、雲を飛ばし砂を捲くときは、怒るが如く、泣くが如く、號ぶが如く、吼ゆるが如き聲、その間よりぞ起りける。人は感け易きいきものなり。然れども足門の内を出でず、目瞞の外に及ばずば、何をか言ひ何をか歌はむ。假令言ふこと有りとも、歌ふこと有りとも、席の上にして水泳ぐすべを論らひ、盲にして色の好惡を定むるが如きことぞ多からまし。こゝに蘇鐵の屋寛といふぬし有り。歌よむわざに長けて、體の長き短きを撰ばず。旅行くことに慣れて道の遠き近きを言はず。年まだわかれば、その業ますゝ進むべく、身なほ羈されねば、その志遂ぐるに易からむ。後の人畏しとは、かかるをぞいふべき。曩に二六新報社に在りて、日々に勇ましきしらべをうたひ、尋ぎて朝鮮に渡りて、しばしば危きさかひに臨みき。この頃歸り來て、わがふせ菴を訪はれしかば、別れて後の言の葉を聞かむとせしに、ほゝゑみて言はず。後二日經てのふみに、わがよめる歌どもを、こたび東西南北となづけて、すりまきにせむとす。はしがきしてよとあり。ぬしの名におふ興謝の海や、天の橋立まだふみも見ぬほどは、いかがあるむと躊躇ひつれど、東西南北といふ名まづいと面白く、この名に由りて、その歌どもの、必ず木を抜き水を溢れしめ、雲を飛ばし砂を捲くいきほひ有りて、はた怒りつ泣き

つ號びつ吼えつする、大風の如きしらべならむことの推測らるれば、一日も早く世に公になりなむことのねがはれて、得も辭まづ拙き一言を添へたり。いでや、このふみ出でなば、席の上にして水泳ぐ術を論ひ、盲にして色のよしあしを定むる輩は更なり、我を除きて世に歌よみはなしと誇り高ぶり思ひあがるらむ人も、背に汗の流るゝふし無きにしもあらずやあらむ、いかゞあらむ。

明治二十九年六月二十三日

阪 正臣

東西南北序

鐵幹、歌を作らず。しかも、鐵幹が口を銜いて發するもの、皆歌を成す。其短歌若干首、之を蔽けば、聲、釣鐘の如し。世人曰く、不吉の聲なりと。鐵幹自ら以て、大聲は俚耳に入らずと爲す。其長歌若干首、之を誦するに、壯士劍に舞へば、風、木葉を振ふが如し。世人曰く、不祥の曲なりと。鐵幹自ら以て、世人皆醉へり、吾獨り醒めたりと爲す。鐵幹自ら恃む所の、何ぞ夫れ堅にして頑なるや。余も亦、破れたる鐘を撃ち、錆びたる長刀を揮うて舞はむと欲する者、只其力足らずして、空しく鐵幹に先鞭を着けられたるを恨む。今や鐵幹、其長短歌を集めて一卷と爲し、東西南北といふ。余に序を索む。余、鐵幹を見る、日猶淺し。之に序する、余が任にあらず。然れども、其歌を知るは、今日に始まるに非ず。

其歌集に序する、亦何ぞ妨げむ。乃ち序をつくる。

明治二十九年七月一日

東京上根岸橋居に於て、

子規子しるす。

序

これ有り、鰐が鰐になるにもあらず。これ無し、鰐が鰐になるにもあらず。序と申すは、まことに、つまに副へたる生妻の如きものなり。われ嘗て新體詩見本を作る。鐵幹調に曰く。

鐵は上野か淺草か

白きを見れば夜ぞ更くる

『姑蘇城外寒山寺』

數ふる指も寐つきまづ

首縊らんか鳩の海

ぶら下らぬぞうらみなる

身をば投んか鷲の峯

もぐり込まぬぞ憾みなる

小楊子むづと手に執りて

喉笛美事に搔切れば

ちよいと痛めど血は出でず

死するも命別儀なし

『天地玄黄千字文』

無理心中は止むべきぞ

前齒にてつみ玉ふとも、二へぎ入れて煎じ方

常の如くし玉ふとも、御勝手なり、ひねとも

やしと、わが問ふ所にあらず。序に代ふ。

病床に於て 正直正太夫

題詞

吾曾誦君句。每每愛清新。
險語驚天下。奇才笑古人。
深山森虎豹。大澤莽荆榛。
一劍三千里。歸來筆有神。

青崖山人

東西南北をよみて

佐佐木信綱

から山に駒をとどめてうたひけむ

高きふしこそ世に似ざりけれ
道のためつくせや吾せますらをの

常にとらむはつるぎのみかは

八重むぐらおひ繁りたる草むらに

そびえてたかし杉のひとつもと

自序

小生の短歌と、新體詩とを輯めたるもの、この『東西南北』に御座候ふ。

小生、八歳にして郷里西京を出で、東西に馳驅すること、茲に十五年。風塵に没頭する餘暇、興を遣り、悶を慰するものは、詩歌に候ふ。故に、小生の詩は、自身に樂むで後、その樂を、人に分つもの、多數を占め居り候ふ。小生の詩、幼年より、聊かの草稿をも、とどめ來らず候ふ。顧ふに、短歌をよめることは、七千首以上なるべしと覺へ候へども、記憶に存するものとは、その五十分の一にも過ぎ

ず候ふ。されば、この四五年間の、新聞雜誌に見えたるものと、小生の記憶に存するものとは擇んで、この一卷と致し候ふ。

小生の詩は、短歌にせよ、新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の精粕を嘗むるものにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ。

小生の詩に、初めて知を辱うしたるは、落合直文先生に候ふ。要するに、先生の懇勸なる策勵にして無かりせば、今日この一卷を公にする勇氣の如きも、生ぜざるべく候ふ。先生の淺香社、由來、靈才繡腸の士多きに係らず、先生の、小生を捨て給はざること、十年

なほ一日の如くに候ふ。小生は、この一卷を公にするに當りて、特に師恩の高大なるを思ひ、未だ、其萬一にだも報じ奉るところなきを、慙愧致し候ふ。

師の令弟鮎貝槐園君は、小生の益友に候ふ。意氣相投じ、肝膽相許すこと、茲に五年。共に同一の事業に従ひて、曾て一日も争はず。その詩、また志を同じうして、互に磨礪するを常と致し候ふ。君久しく、韓山に留りて歸らず。『東西南北』の印刷前、一たび君が細評を煩すの暇なかりしを遺憾に思ひ候ふ。

曾て、小生の詩に「露骨」との評を賜ひしは、帝國文學記者、青年文記者の兩君にして、「生硬蕪雜」との評を賜ひしは、六合雜誌記者、太陽雜誌記者の兩君なりしかに覺え候ふ。小生が、一時、現代諸名家の歌評を試みし際に、

宮内省派をして、顔色なからしむるも、得る所なかるべし。寧ろ、意を轉じて、少年詩人の誘導に、盡力せずやといへる意味の勸告を賜ひしは、小日本新聞記者の君にして、又、新體詩の新體詩らしきもの、我れ初めて、鐵幹に於て之を認むとの評を賜ひしは、日本新聞記者の君なりしと存じ候。この外、小生の詩に對して、從來批評を賜ひし諸君、少からず。早稻田文學記者、太陽雜誌記者兩君の如きは、屢々、小生の惡詩に向ひて、過分の注意を加へられしが如し。抑、毀譽何れにせよ、小生は、諸君の批評に由つて、小生が、發憤自勵の念を増したることを、幸榮と心得候ふ。

こゝに、謹で諸君に對し、満腹の敬意と、謝意とを表し申し候ふ。本書は、得るに従ひて、編輯せしもの。前後の順序もなく、聯絡もなし。小生の、萬事に疎放なること、今に改らず。御推恕を願ひ候ふ。

小生は、詩を以て世に立つ者にあらず候へども、短歌にもあれ、新體詩にもあれ、世の専門詩人の諸君とは、大に反對の意見を抱き居る者に御座候ふ。されど、最早議論の時代にあらざると心得候へば、申し述べず候ふ。

世に、駄評家多し。小生は、本書に對し、何卒、眞面目なる、詩的批評を賜らむことを、切望致し候ふ。

明治廿九年六月十七日、東北、宮城巖手青森諸縣、大海嘯の慘狀を想像しつゝ、著者自ら、東京の寓居に識す。

此為试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

無題二首

野に生ふる、草にも物を、言はせばや。
涙もあらむ、歌もあるらむ。
花ひとつ、緑の葉より、萌え出でぬ。
戀しりそむる、人に見せばや。

韓廷に、十月八日の變ありて、未だ二旬
ならざるに、諸友多く、官にある者は、
歸朝を命ぜられ、民間にある者は、退韓
を命ぜらる。余もまた、誤つて累せられ
むとし、幸に僅にまぬかる。こゝに於
て、一時歸朝の意あり、諸友中、廣島に
護送せらるゝ者と、船を同じうして、仁
川を發し、字品に向ふ。船中無聊、諸友
みな、詩酒に托して興を遣る。當時、余
また數詩あり、その記憶するものゝ一に
云く。

から／＼と、笑ふも世には、憚りぬ。
泣きなばいかに、人の咎めむ。

子規

世に出でし、人は歸るを、わすれけむ。
むなしき谷に、啼くほとゝぎす。

棄婦

いねとある、このふみもなほ、君の手と、
思へばなかく、裂かれざりけり。
得意の詩

都を出でて何地ゆく、
しばしは語らへ駒とめて、
君と飲まむも今日かぎり。
「西、陽關を出づれば故人無し。」
ゐなかに行かば美き酒も、
顔よき乙女もあらざらむ。」

我友は、軽くひとつき飲みほして、
たかく笑ひぬ、から／＼と。
大男兒、王侯の手を握らずば、
一枝の筆を杖とせむ。
天下の山天下の水、
われを迎へて餘りあり。
君見ずや、失意の時こそなかくに、
得意の詩篇は成るべきぞ。」

心

うるはしく、心はもたむ。飛ぶ蝶を、
まねくも花の、にほひなりけり。

廿八年の夏、京城にありて。

思ふこと、いはむとすれば、友はあらず。
さよふけてきく、山ほとゝぎす。

西京比叡山の麓に住みける
秋。

雲はみな、浮世に出でて、山里に、
のこるは月と、我となりけり。

三國干涉の事などきゝて、
鐵幹のもとに。

京城にて 槐園

國のため、家をも身をも、妻子をも、
わすれし袖の、なにに濡れけむ。

槐園に復す。

口あきて、ただ笑はばや。我どちの。
泣きて甲斐ある、この世ならねば。

僑居偶題

書冊の塵ははらはねど、
仔細に太刀の錆は見る。
よし貧賤に身はおくも、

捨てぬ丈夫の意氣一つ。
 去年の夏のこのごろよ、
 われ韓山に官を得て、
 謀るところも多かりし、
 それも今更夢なれや、
 世は慨くまじ徒らに、
 小吏の怒りを買ふばかり。
 詩は廢せむか終にただ、
 才子の名のみ残るらむ。
 竹蕭々門を閉ぢ、
 窓にはなびく茶の烟。
 石落々水を引き、
 池にはをどる魚の影。
 しばし疾をやしなひて、
 都にちかき假らずまひ、
 こゝも浮世をのがねば、
 猶もくるしむ午の熱。
 おもへば去年冬の旅、
 雪に鳥嶺の險こえて、
 一こゑきける虎の聲、
 いかに心もさむかりし。

『太陽』といふ雑誌の紙上、明治新體詩
 家の中に、君の名をも、つらねありと、
 人のいふ。

風流男の、名だに恥ぢしを、歌よみて、
 世に誇る身と、いつなりにけむ。

櫻花十首

富士の山、のぼりもはてぬ、しら雲は、
 麓の峰の、さくらなりけり。
 ひく汐に、さくらちり浮く、おぼろ夜は、
 龍のみやこも、春やしるらむ。
 さきにほふ、千鳥が淵の、山ざくら、
 春のふかさは、知られざりけり。
 隅田川、花やちるらむ。漕ぐ船の、
 苔に色ある、夕あらしかな。
 恥しらぬ、人に見せばや。時ぞとて、
 かるくちり行く、山ざくら花。
 姫君の、琴の音やみて、高殿は、
 花のふぶきに、なりにける哉。
 月ひとつ、堤に花の、かげ多し。
 笛ふく人は船にやあるらむ。
 わが駒も、一こゑなきぬ。高嶺より、
 櫻ふき捲く、山おろしの風。
 あら驚の、つばさや觸れし。高嶺より、
 枝ながらちる、山ざくら花。
 日の本の、櫻のあらし、吹きにけり。
 千里の海の、花のしら浪。

正岡子規君を訪ひて

君が閑居を言つれて。
 おどろく君が瘦せたるに。
 世をも人をも思はずは、

かゝる病もなかりけむ。
 權貴に媚びて私利のみ、
 はかる詩人の多き世に、
 君が吐く血の一滴も、
 思へば得がたき賜や。

此夏六月七日、友人黒崎美
 知雄の、吉野艦に便乗して、
 再び臺灣に赴くを送る。

萬里の浪に船うけて、
 南の島に復も行く、
 ますら猛夫のころざし、
 腰なる太刀や知るならむ。
 野には檳榔みのるなり、
 山にはレモン花ぞさく。
 島夷の酒の甘きには、
 いしばし憂もわするべし。
 淡水の市雨すぎて、
 基隆の港月ぞすむ。
 夜半に少女の歌きかば、
 いかに袂やしほららむ。
 去年總督にしたがひて、
 戦記つづけるその筆に、
 山河風土の奇をかくも、
 またつれづれの興ならむ。
 花はさくら木ひとは武士、
 武士によき名の吉野艦、
 けふ横須賀を舟出して、

載^いて、い^いく、か^か快^快男^男兒^兒。
友^友の^の壯^壯圖^圖を^を送^送る^ると^とて、
こ^この^の一^一篇^篇の^の詩^詩は^は賦^賦と^とど、
都^都を^を出^出で^でて、遠^遠く^く行^行く、
宰^宰相^相の^の意^意は^は我^我れ^れ知^知ら^らず。

大磯にありける夏。

夕立の、雲は沖より、めぐりきて、
汐の雨ふる、磯の松原。

詩友北村透谷を悼む。

世をばなど、いとひはてけむ。詩の上に、
おなじころの、友もありしを。

幼き頃かゝる口つきの歌
もあり。

梅もどき、こぼれそめけり。蜘蛛のいの、
かゝる伏屋の、秋もいぬらむ。
夕かぜに、尾花の袖は、まねけども、
暮れゆく秋は、とまらざるらむ。

放魚

盆地三尺みづあさし。
汝が身をおくに足らざるらむ。
行けよ行け、今放つ。」

世は濁れどもその中を、
たどりたどらば一筋の、
清き眞水の無からむや。

涼車、御殿場にいたれる頃、
奇寒骨に徹して、夢たまた
ま覺む。

富士の根の、神代の雪に、臥すと見て、
さむれば富士の、麓なりけり。

攝津の住吉に遊びて。

住の江の、松原ゆけば、すが／＼し。

神代ながらの、風の音する。

住吉神社に詣でて、幼時、
この地に住みしことなど、
思ひ出づ。

うき身には、神のちぎりも、たのまれず。
祈りてあだに、十とせ經にけり。

集鴨の里にすみける春。

椎の實の、しづむ古井も、春めきて、
泡だつ水に、かはつ啼くなり。
賤が家の、山吹さけり。あるじには、
歌よむほどの、少女子もがな。

乞見^{かみ}らが、着^かずてし野邊の、朽ちむしろ、
朽ち目よりさへ、さくすみれかな。

嵯峨の花見に行きて、途上
雨にあふ。

鋤^すきかへす、牛の背しろし。雨まじり、
櫻ふき下ろす、山おろしの風。

秋日鴨東に飲む。席上、歌妓某に代りて、
その情人の、獨逸に留學せるものを憶ふ。

梧^きの葉を、けさ吹く風も、君がます、
西としきけば、嬉しかりけり。

妓に代りて。

思あれば、千すぢの絃^ひも、しらべてむ。
何に三すぢと、人は定めし。

月

世のなかに、秋より外の、里もがな。
思ふことなく、月やながめむ。

蟲聲

夕月夜、野を分け行けば、葛^{くわ}の葉の、
高きあたりに、松蟲^{しょうむし}のなく。

駒込に住みける秋。

露とのみ、秋はかざらず、松の葉を、
わたる風にも、袖はぬれけり。

豊公

人の靴、とりてさざげし、手のひらに、
天が下をも、もてあそびけむ。

京城に秋立つ日、槐園と共に
賦す。時に、王妃閔氏の
專横、日に加はり日本黨の
勢力、傾に地に墜つ。

韓山に、秋かぜ立つや、太刀などで、
われ思ふこと、無きにしもあらず。
から山に、吼ゆてふ虎の、聲はきかず。
さびしき秋の、風たちにつけり。

京城守備の後備兵、秋に入
りて、未だ現役兵と、交代
歸朝すべきの命なし。

戈まくら、親おもふ人の、夢をのみ、
韓山おろし、吹かずもあらなむ。

槐園と、全羅道の木浦に、航する舟中。

あら浪の、八重の汐路も、まどろみて、
見れば見るべき、夢はありけり。
木浦鎮に、鈴蟲松蟲の類多し。

はなれ島、磯回の月に、松むしの、
まつてふ聲は、誰がとどめけむ。
全羅道の、珍島に宿しける夜。
松千株、雨かときけば、月さえて、
沖のはなれ島、ただ八重の浪。

根岸に住みける夏。

青柳の、かげゆく水に、月見えて、
水鶏なくべく、夜はなりにけり。

河内に遊びける夏。

野づかさ、浮世の夏を、逃れきて、
ひとり風もる、身こそ安けれ。

八重の浪(友の南洋に行くを送りての作 廿六年八月)

千里ふく、沖つ汐風に、眞帆あけて、
益荒猛男の、わが友は、南の洋の、
鰯のすむ、マニラを掛けて、

いたづらに、行く旅ならず、事成らば、
御國の榮え、身の譽れ。功とく立て、
歸り來よ。豊酒かみて、我れまたむ。

こちよの、君が旅路や。おもしろの、
けふの別や。船の上に、巾打ふりて、
かへり見る、友の心や、いかならむ。

ひと聲の、笛の響を、名残にて、
船は出でけり。友いづこ、その船いづこ。
かげ消えて、見ゆる限りは、八重の浪。

枯れたる葛の葉を摘みて、
そのうらに題す。

露霜に、枯れても葛は、秋かぜの、
むかしのうらみ、忘れかぬらむ。

野菊

まねくたもの、花すすき、
なまめく色の、をみなべし、
よその榮えは、うらやまじ、
ものにはものの、分限あり。
野菊は、いつも、野菊にて、
ひとりかをらむ、岩かげに。

威鏡道を旅行して、雪中に、
虎の吼ゆるをきくこと、三
回。

いでおのれ、向はば向へ。逆剗きて、
わが佩く太刀の、尻鞘にせむ。

江原道の金剛山に登れるに、山僧、紙を展べて、一詩を題せよといふ。乃ち、左の歌をかきて、意譯して見す。僧ども、日本の歌といふもの、今初めて聞けりとて、喜ぶこと限なし。

山はよし、いでや一斗の、墨すらむ。

かきおく歌は、千代にのこれよ。

金剛山の僧某、紅梅に雪のふりかかれる畫、一枚を贈りて、賛には、日本の歌を題せよといふ。

雪に寝て、こころなか／＼、燃えにけり。

なれはやさしの、花にもあるかな。

祭南洲先生 (二十八年八月作)

その名ばかりを打聞きて、その跡のみをながめつつ、よきにあしきに論らふ、拙なき史家は世にあらじ。あはれ抱負は大ながら、時機に違ひて遂げざりし、英雄偉人の身のをはり、誰か涙のなかるべき。「我馬たふれ我矢つき」、秋かぜ寒きふるさとに、むなしく屍をとどめたる、薩摩男兒のあはれさよ。猛き武臣のこころをば、

歌よむ公卿の知るべきか。あたらしく血の征韓論、愚論と嗤ひてすてられつ。國威を外夷にしめすべき、いくさもせむと願ひしを、眞心になきあらそひに、賊と云ふ名も負ひにけり。賊と云ふ名はなげかねど、國威をしめすはいつの時。眞心になきあらそひも、ことわりありと知るや誰。その名あだなる城山に、敗れし人の靈祭り、かさね／＼てけふここに、十八回の秋は來ぬ。かはればかはる世の姿、今はえみしを討つために、王師十萬海をこえ、捷報しきりに耳を打つ。天皇陛下のかしこさも、大和男兒の雄々しさも、こたびの軍に世に知れて、朝日とあがるわが國威。かゝる時しも君あらば、空しく果てしそのかみの、子弟三千ひきつれて、いかなる戦かなすならむ。このみいくさを君知らば、争ひたりしそのかみの、

恨まはれていかばかり、うれしと笑をも含むらむ。けふの君への手向には、千部の讀經それよりも、えみし討つてよの大御詔、我は讀みつづ捧けてむ。

大歌所の寄人、大口鯛二君の、征清總督府に従ひて、遼東に赴かるるを送る。

宮人の、歌をよわしと、そしりしは、君と相見ぬ、むかしなりけり。

長兄和田大圓、密宗に僧たり。その従軍布教使として、遼東に行くを送る。

世をおほふ、なさは一つ。みいくさの、旗手にまじる、墨染の袖。

洛北岡崎に住みける冬。

霜ばしら、朝日にをれて、稻ぐきの、立てるもさむし。岡崎の里。

貧女

門に立ちて、物乞ふためと、玉琴を、

世のたらちねは、教へざりけむ。

蟬

ははそ葉を、時雨^{しぐれ}のたたく、心地して、
秋にまぎるる、蟬のこゑかな。

郭公

一こゑは、松の風と、なりにけり。
尾上すぎゆく、山ほととぎす。

洛東の雛妓某、その片袖を斷ちて、われに贈り、「ならはねば、いかにこゝろを、言ひやらむ。只この袖は、常の涙か」といふ一首を添えたり。某は、歌よむ風情のものにあらずと思ひ居りしに、果せるかな、詩友なにがしの、戯れけるところなりけり。袖につけて、妓のもとに、返しける歌。

あだに寄する、袖師の浦の、夕浪に、
ぬるるはやすし。如何に干すべき。

涙

まことあらば、なか／＼音には、出でざらむ。
わが涙さへ、うらまるるかな。

備前に住みける冬。

木の芽さく、うしろの畑に、霜見えて、
けさは身にしむ、山鳩のこゑ。

病を載せて、都を出でしが、大磯に至り
つきたる夜、風をひき添へたり。頭痛く
熱高し。ねむられぬままに。

大君に、たてまつりたる、身にしあれば、
荒き風にも、あてじとぞ思ふ。

この歌を、おなじやうにて、鎌倉に遊び
居れる、槐園がりおくりたるに、いまだ
死ぬべき時にはあらず、新體詩出来たら
ば、見せよなど、走り書きして、次の一
首をつづけたり。

風の音に、おどろかさされて、益荒男^{ますらお}の、
夢やすからぬ、秋は來にけり。

大磯の秋、さびしきがならひなれど、こ
としは、分きてさびし。涼車はつけど、
下る高帽なく、妓はあれど招く美髯なし。
夜に入りては、さびしさも猶ひとしほな
り。火の影は見ゆれど、亂痴戲^{らんちぎ}さわざは
聞えず。さすがに、數ふるばかりなる絲
の音は、せめての心やりなるべし。それ
も、いとしのびやかにひびく。思へば、
戦争ほど、うれしきものはなし。我慢の
出来ぬ人も、我を折れば、まして、瘦我慢
を競ふ人やあらむ。あはれ、大磯も今

はただ松の嵐、浪の月、清貧おのれの如
きに、適するあるのみ。

二夜^{ふたよ}ねて、蟹のころに、なりにけり。

松間のあらし、浪の上の月。
身の爲に、身はいたはず、我もまた、
召さばたふとき、君の御楯ぞ。

大磯に七日ありて、箱根にゆく。塔の澤
こもさびしきは、大磯とかはらず。
都出でて、けふ越えくれば、うたにきく、
箱根八里は、みな秋の風。

俠客八公と呼ぶ者、人夫五百に長として、
戦地に赴かむとす。その徒、箱根に來り
て、人夫を募り居るに遇ふ。乃ち、一詩
を與へて、八公に傳へしむ。

花はぐれなみ酒はうまし。
物のなざけは我も知る。

千兩萬兩つまばとて、
かろくは許さぬ男七尺、
君のおんためと聞くからに、
いざ奉り申し候ふ。」

この胸に萬巻の書は藏めねど、
この腕に三尺の劍は覺えあり。

來れ五百の我伴、
支那四百州、土足にかけむ。
おもしろや里の八公、
けふよりは豊公以上。